



TITLE:

建物) とマダン (庭) との関係から
みた住み方に関する研(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

金, 海梨

CITATION:

金, 海梨. 建物) とマダン (庭) との関係からみた住み方に関する研. 京都大学, 2017, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20358>

RIGHT:

京都大学	博士（工学）	氏名	金海梨
論文題目	韓屋におけるチェ(建物)とマダン(庭)との関係からみた住み方に関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、韓国の伝統的な木造住宅「韓屋」（「ハンオク」又は「ハノク」と読む）における「チェ(建物)」と「マダン(庭)」からなる住空間と住まい手の対応関係を検討することによって、その住み方を解明するものである。本研究では住まわれている時代が異なる事例を取り上げ、チェとマダンからなる住空間の現状と実際の使われ方を把握している。その上で、韓屋におけるチェとマダンとの関係の分析を行い、時間軸のなかで韓屋の住み方を総合的に考察し、さらに、今後の韓屋の住空間計画のあり方について考察している。本論文は以下に示す6つの章から成る。</p> <p>第1章は序論であり、韓屋を取り巻く近年の動向を把握し、既存韓屋の持続的活用や新しい韓屋開発の現状において屋内外の関係を考慮した住空間計画のための知見が不足している現状を指摘し、韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方の研究を行う必要性を示している。その上で、本研究の目的とそれを達成するための課題、研究の位置づけ及び方法の説明を行っている。</p> <p>第2章では、文学作品に見る戦後激動期韓屋における住み方について検討している。朝鮮戦争直後の1954年、大邱市のとある韓屋で住んだ日常の物語を題材とした自伝小説『庭の深い家』を取り上げ、住空間の現状や実際の生活の様子が分かる記述の分析を行っている。その上で、戦後の特殊な社会状況の下でも伝統韓屋のように複数のチェと複数のマダンによって家全体が形成される空間の相互関係は持続されていることを明らかにしている。一方、チェとマダンとの関係に対応してきた住み方については、住空間の物理的現状は伝統韓屋に類似していても、チェの使われ方の点ではむしろ都市韓屋の使われ方に類似していることを明らかにしている。なお、マダンはいまの住まい手の日々の生活を多面的にサポートしていることを明らかにしている。特に、伝統韓屋では身分性別が異なる構成員の物理的・心理的距離を確保する緩衝空間であったマダンは、お金持ちの大家世帯と貧困な借家世帯の同居を成立させる緩衝空間となっており、戦後の特殊な状況の下でも構成員間の物理的・心理的距離を確保する緩衝空間としての役割を果たしていることを明らかにしている。</p> <p>第3章では、近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方について検討している。1970年代に入居以来、住まい手の住要求に応じて増改築が繰り返され、現在も住み続けられている都市韓屋事例を取り上げ、住空間と住まい手の対応を検討した上で、動線の接続からチェとマダンとの関係を分析している。対象事例では、チェとマダンからなる住空間形式は維持されているものの、チェとマダンとの関係は希薄化しており、チェの使われ方の閉鎖化、マダンの使われ方の固定化が進んでいる現状を明らかにしている。なお、このような現状は、温熱環境の改善及び収納空間の確保のための増改築に起因していることを明らかにするとともに、韓屋におけるチェとマダンとの関係の柔軟性を確保するためには韓屋の住空間計画における温熱環境の改</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	金海梨
<p>善・収納空間の確保をいかに解決するかが重要な課題であることを指摘している。なお、マダンの使われ方の固定化によって、今後起こりうる予測困難な環境変化に対して柔軟に対応することが難しい状況となっていく可能性があることを指摘している。</p> <p>第4章では、2000年代以降に入居している近年の韓屋再生活用事例を取り上げ、住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方について検討している。さらに、第3章から分析方法を深め、動線のみならず視線の接続も含めてチェとマダンとの関係を分析している。対象事例では、チェとマダンからなる住空間の形式を維持しながらも住まい手の多様な価値観に対応した改修が行われ、現代に合致した生活が営まれていること、なお、このことは、住まい手の意図や意志のみならず、韓屋の住空間に対する十分な理解と実戦的経験を持った建築家の介入があったからこそ実現可能だったことを明らかにしている。チェとマダンとの関係からみた住み方については、動線・視線の接続のバリエーションが改修後さらに増え、住まい手自らが建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節し、季節に対応する伝統的な生活の良さが享受されていることを明らかにしている。なお、都市韓屋では省略されてきた見るためのマダンに対する住要求も生じていることを指摘している。</p> <p>第5章では、第4章の考察を踏まえ、異なる価値観、それに応じて求められる多様な状況と韓屋の住空間がどのように対応しているのかを実証し、韓屋の住空間の普遍的価値をより多面的に考察するために、外国人の事例における住み方を検討している。対象事例では、韓国人とは歴史文化の背景や生活習慣が異なる外国人住まい手の好みに対応して様々な改修が行われたものの、チェとマダンからなる住空間の形式は維持されていることを明らかにしている。チェとマダンとの関係からみた住み方については、伝統的な外見や伝統建具を保全しながら季節の変化に対応するために、取り外し可能なサンルームや床暖房を付けないマル空間を新たに導入することによって住まい手が自らチェとマダンとの関係を調節し、季節に対応する生活が営まれていることを明らかにしている。なお、第3章と第4章を踏まえ、チェとマダンとの関係を住まい手自らが調整し、季節に対応する住み方の実現には建具をいかに計画するかが重要であることを指摘している。</p> <p>第6章は結論であり、前章までで得られた知見を踏まえ、韓屋の住空間の現代的価値を以下のようにまとめている。①チェとマダンからなる住空間形式は異なる価値観を持った現代の住まい手の多様な住要求に対応できており、普遍性を持った住宅計画の要素、②マダンは単なる空地ではなく住まい手の住要求を多面的に支援する屋外の生活空間であり、不特定の変化に柔軟に対応できる緩衝空間、③チェとマダンとの関係に基づいた生活の良さ、生活文化の享受のためには、建具の開閉による動線・視線の接続の操作性が重要、であることを明らかにしている。なお、今後の韓屋計画のあり方について①チェとマダンとの関係を住まい手自らが調整するための建具の工夫②生活文化の継承・発展も含めた議論の深化③予測困難な状況に柔軟に対応できる空いているマダンと見るマダンに対する住要求の両方を考慮した住空間計画の必要性を挙げており、結論としている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、チェとマダンからなる韓屋の住空間の形式に着目し、韓屋の住空間が時代の変化の中で人々の日常生活にどのように対応してきたのかを検討したものである。その上で、韓屋の現代的価値を見直すとともに、今後の韓屋計画のあり方について考察したものである。得られた主な成果は次のとおりである。

1. 文学作品に見る戦後激動期韓屋における住み方の解明(朝鮮戦争直後の1954年)

戦後の特殊な社会状況の下でもチェとマダンからなる住空間は持続されており、チェとマダンとの関係に対応してそれぞれの住まい手の住要求に対応した生活が営まれていることを明らかにした。特に、マダンは住まい手の日々の生活を多面的にサポートしており、大家世帯と借家世帯の住まい手が物理的・心理的距離を確保することができるようにする緩衝空間としての役割を果たしていることを明らかにした。

2. 近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方の解明(1970-2000年代)

チェとマダンからなる住空間の形式は維持されているものの、チェとマダンとの関係は希薄化しており、チェの使われ方の閉鎖化、マダンの使われ方の固定化が進んでいる現状を明らかにした。なお、このような現状は、温熱環境の改善及び収納空間の確保のための増改築に起因していることを明らかにした。その上で、韓屋におけるチェとマダンとの関係の柔軟性を確保するためには、韓屋の住空間計画における温熱環境の改善・収納空間の確保をいかに解決するかが重要な課題であることを指摘した。なお、マダンの使われ方の固定化の現状について今後起こりうる予測困難な環境変化に対して柔軟に対応することが難しい状況となっていく可能性があることを指摘した。

3. 住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方の解明(2000年代以降)

異なる価値観を持ったそれぞれの住まい手の住要求、好みに合わせた多様な改修が行われながらも、チェとマダンからなる住空間の形式は継承されており、現代に合致した生活が営まれていることを明らかにした。このことから、韓屋の伝統的な住空間の現代的価値を再評価するとともに、韓屋の住空間や生活文化の継承・発展において住まい手と専門家の意識が大事であること、チェとマダンとの関係に基づいた生活の良さを享受するためには、動線・視線の接続を住まい手自らが調節できるように建具の操作性のバリエーションが確保される環境が重要であること、などを指摘した。これらをもとに、今後の韓屋計画のあり方について考察した。

以上、本論文は、チェとマダンとの関係からみた韓屋の住み方を時代の変化とともに総合的に検討した上で今後の韓屋計画のあり方について考察しており、生活文化の継承・発展の観点を含めた韓屋計画の議論が不足している現状に対して学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。